

原告 星恵土 ゼイン 意見陳述

令和6年4月15日

裁判官の皆さんこんにちは。

本日は私の意見陳述の機会を与えていただき、心から感謝申し上げます。

私がここに立つに至った経緯と、私が伝えたいことをお聞きいただければ幸いです。

私の話をする前に、「あ、この人日本語うまいな」と思った人はこの部屋に何人いるのでしょうか？もしかするとそれこそが偏見の始まりで様々な差別を生んでいるのかもしれない。私のような人は皆さんが思っている以上にたくさんいます。今後はもっと増えてくるでしょう。

大前提として、私は、職務質問は、犯罪防止や治安維持に役立つ警察業務の一つですから、日本に住んでいる以上、警察の適切な職務質問には協力をする義務があると考えています。

自己紹介をさせていただくと、私はパキスタンで生まれ、8歳で来日し、日本の教育を受け、日本国籍を取得したのは13歳、中学生の頃でした。

今までずっと日本人として生きてきました。

大学生の時から、頻繁に職務質問を受けるようになりました。

例えば、予定に遅れていて早歩きをしていただけで、警察官に止められ、壁に押しえつけられて質問されたこともありました。「こんな急いでどこ行くの？ 在留カード見せて」と言われました。

僕は、免許証を出しながら、「在留カード持っていません」と言うと、警察は「何で持ってないの」と続けて質問します。

質問というよりも、「取り調べ」に近いかもしれません。

「在留カードがないとどうなりますか？」と聞いたところ、警察官は「なかったら、きみを逮捕しなければいけないよ」と言いました。

他にも、大学の帰りに、パトカーに乗った警察官に止められ、「なにをしているのか」と聞かれ、「家に帰るだけだ」と答えると、「在留カードは？」と重ねて聞かれました。

私は日本国籍ですから、当然、在留カードはありませんし、パスポートもありませんでした。パスポートとは旅券なので日本に旅行しているわけではないので国内で持ち歩くことがないです。

私は、しかたなく、運転免許証と保険証を見せて、自分の経歴を説明しますが、それでも「日本国籍を取ると在留カードがなくなるの？ 持ち歩かなくてもいいの？」。

今まで何度も職質を受けてきた私でも、さすがにこの質問には衝撃を受けました。

質問というよりも、「なじる」という感じの言い方でした。

私は、名字が漢字になっていて、帰化した経緯もしっかり説明したのですが、理解してもらえませんでした。

残念ながら、私には、それ以上「自分が日本人である」ことを証明する方法がありません。

また、自転車に乗っているときに職務質問を受けた際、真っ先に「これ、お前のチャリじゃねえだろ」と言われました。

その時も、何か抵抗したわけではありません。

自分の自転車であることを証明し、そしてまた在留カードの提示を求められ、その都度、自分が日本国籍であることを説明しました。

他にも、1日に2回職務質問を受けたり、自宅の目の前で職務質問を受けたりしたこともありました。

こんなとき、私は「ああまたか」という諦めのような、しかし、なかば釈然としない気持ちになります。

そうした経験をしてきて、職務質問に疑問を感じ、私は職務質問と警察のあり方を考えるようになりました。

職務質問とは、警察官が自分たちの第一印象で判断して行う行為であり、見た目や一瞬から生まれる第一印象を、すぐに変えることはなかなか難しいかもしれません。

ただ、第一印象のままに相手に接すること。

これが偏見や差別のつながるのだと私は考えます。

その結果が、「お前のチャリじゃねえだろ」「在留カードないと逮捕するぞ」
「日本国籍を取ると在留カードはなくなる？」などといった、高圧的な対応や
言葉遣いになっているのではないのでしょうか？

職務質問は、犯罪をしそうな人にする事になっていると聞きました。

でも実際には一般人、普通の生活する人も受けます。

もしこの体験を私だけがしているのであれば、「仕方ないか、しょうがない」
僕だけがそうになっているだけだと思い、そのまま止まっていたことでしょう。
ただ、これが僕以外の場所でも様々な地域で同じように繰り返し行われている
現状が日本にあると思います。

今の日本の現状を見た時に、外国人労働者が増え、日本に生まれ育っている海
外ルーツの人も増えてきております。

海外ルーツの人が、日本を代表して、スポーツや様々なところで活躍しており
ます。

彼らも日本の社会のため、より良い治安のために生活をし、この日本を支えて
いくことでしょう。

私は周りの人と職務質問について話す機会が増え、海外にルーツを持つ日本国
籍保有者や、日本に住み続けている人たちから、私と同じように職質も何度も
受けて、「警察の高圧的な態度を受けた」という経験が多く寄せられました。

一方で、海外にルーツを持たない日本人の人たちは、そもそも職務質問もされ
たことがない、長年生きていて1～2回されたことがあるかないかぐらいだ
といわれました。

私は警察に「なぜ私に職務質問をするのですか？」と聞いても、警察の方は「みんなにしています」との回答しか返ってきません。

- ・果たしてどれだけの職務質問が行われているのか？
- ・どういう人たちに職務質問をしているのか？
- ・どのような職務質問をしているのか？
- ・警察の対応は適切だったのか？

私が求めているのは、職務質問の透明性、信頼性。いわゆるデータです。

「外国人イコール犯罪者」

そういうイメージがあるのならば、その根拠は何なのか？

私はそれをいくら調べても「外国人イコール犯罪者」という結果を、導くことができませんでした。

海外にルーツを持つ人に対する偏見が、社会と警察内に蔓延しているのではないかな。

職務質問の透明性を高め、データに基づいた適正な運用を行う。

ボディカメラといったツールで、後からでも事実確認が取れるようにする。

これらにより、お互いが協力し合うことで時間短縮ができ、職務質問そのものを効率化することで、社会全体の治安の向上につながると信じています。

皆さん、この裁判は戦いや喧嘩、日本を悪くするものではないです。

お互いを理解し合い、認識し合い、お互いに協力し合うためのものです。

そして、日本をより良くするためのものです。

この裁判が日本のための、そしてお互いの理解を深め合うための、一步を切り出すカギになることを願っています。

以上